



明清時代におけるキリスト教美術の「中国化」

聂, 琪

(Degree)

博士 (学術)

(Date of Degree)

2025-09-25

(Date of Publication)

2027-09-25

(Resource Type)

doctoral thesis

(Report Number)

甲第9277号

(URL)

<https://hdl.handle.net/20.500.14094/0100498317>

※ 当コンテンツは神戸大学の学術成果です。無断複製・不正使用等を禁じます。著作権法で認められている範囲内で、適切にご利用ください。



論文内容の要旨

論文題目 (外国語の場合は、その和訳を併記すること。)

明清時代におけるキリスト教美術の「中国化」

氏 名 : 聂 琪

神戸大学大学院人文学研究科博士課程後期課程社会動態専攻

指導教員氏名 (主) 宮下規久朗 教授
(副) 野田麻美 准教授
(副) 濱田麻矢 教授

(注) 4, 000字程度(日本語による)。必ずページを付けること。

要 旨

『大秦景教流行中国碑』により、唐貞観九年（635）、キリスト教の支派であるネストリウス派の主教阿羅本は宣教団を率い、「経像」を手を持ち、首都長安に到達した。これはキリスト教信仰と中国文化の初めての接触である。唐代の人々は当時のキリスト教を「景教」と呼んだ。阿羅本がもたらした「経像」は、中国における最初のキリスト教図像の記録である。しかし、唐の武宗の治世における武宗による仏教弾圧に伴い、西方より伝来した宗教はすべて禁圧され、景教もそれに伴って徐々に衰退・消滅していった。1517年、マルティン・ルターがローマ教皇庁に反抗したことに端を発する宗教改革により、プロテスタントが誕生した。その後のプロテスタントの隆盛と急速な伝播は、ローマ教皇庁の権威を弱体化させた。そのような背景の中、カトリック教会はイエズス会を結成し、ローマ教皇パウルス3世が1540年にその設立を承認した。その目的は、新航路開拓国における布教の機会の拡大である。以後、イエズス会士は中国・日本・インドなど東方諸国へ布教活動を開始した。明末期におけるキリスト教の急速な普及は、イエズス会会士の布教活動と密接に関連している。

宣教師たちの中国来訪は、明後期の学者たちの知識の視野を拡大し、天文学・暦法・地理学・水利工学・数学・芸術など諸分野における重要な著作の誕生を促した。1583年にイタリア人宣教師ミケーレ・ルッジェーリおよびマッテオ・リッチが中国に進出した明万暦七年（1579）が「中国における宣教の基盤が確立された年」と見なされており、リッチの来中は「西洋美術が中土に伝来した始まり」とも位置づけられている。顧起元の『客座贅語』（1617年）には、リッチが「五色で描かれており、生き生きとしている。陰影があり、はっきりとした顔立ちで描かれている」という聖母子像の銅版画を所持しており、その陰影表現が中国画と異なっていることについて述べた記録がある。この記述から、陰影法が宣教師によって中国にもたらされたことが確認できる。イエズス会士が書籍を媒介として中国人に宣教するため、『程氏墨苑』・『誦念珠規程』・『天主降生出像経解』・『進呈書像』などのキリスト教版画入り書籍を刊行した。そして、清朝宮廷において、中国伝統の木版画とは異なる新たな版画形式として銅版画が登場した。咸豊元年（1861）に創設された土山湾画館は、キリスト教美術に関連した多くの作品を生み出すとともに、西洋画法と中国絵画様式を兼ね備えた「中国風」と称される独自の画風を形成した。

中国のキリスト教美術についての早い時期の研究は、1910年にベルトルト・ラウファーが発表した論文「中国のキリスト教美術」、1921年にポール・ペリオが発表した「利瑪竇時代に中国に伝来したヨーロッパ絵画と版刻」および1927年の「17・18世紀におけるヨーロッパの中国美術への影響」、1930年に向達が発表した「明清之際における中国美術の西洋影響」、1939年にパスクワーレ・M. デリアが執筆した『1583－1640年における中国キリスト教美術の起源』などが挙げられ、中国を含む極東地域におけるイエズス会美術史研究の基礎を築いた。1995年には青木茂・小林宏光監修のもと、町田市立国際版画美術館が開催した展覧会『中国の洋風画展 明末から清時代の絵画・版画・挿絵本』の図録に、

多くの研究者による明清期洋風画の研究成果が収録された。ガゴ・ヴァン・アレクサンダー・ベイリーが1999年に出版した『1542-1773年 アジアおよびラテンアメリカにおけるイエズス会芸術』において、キリスト教絵画・版画・建築のみならず、研究対象を刺繍などの工芸美術にまで拡大し、中国キリスト教美術の図像資料を豊かにした。

本課題に関しては過去に多くの学者が研究を行ってきたものの、図像の議論は概ねキリスト教の発展史における文化および芸術の発展成果を概説する範囲にとどまっており、図像の解釈は主たる焦点とされていないか、あるいは特定作品の解釈に限定されている。本論の執筆目的は、まず明清時代におけるキリスト教美術の「中国化」の発展過程を整理し、それを中国美術史の研究の枠組みに組み込むことである。また、この過程において、キリスト教文化と美術が中国においていかに展開・変容し、いかなる影響を及ぼしたのかを考察することを目指すものである。

本論における個別事例研究および図像分析の重要な対象は、程大約による『程氏墨苑』に収録されたキリスト教版画、ダ・ロシャの『誦念珠規程』、ジュリオ・アレニの『天主降生出像経解』、およびアダム・シャルの『進呈書像』など、宣教師が主導して編集・出版した木版挿絵書、清朝宮廷画家として宣教師が制作した皇室肖像画と銅版画、さらに土山湾画館において制作された中華聖母像が含まれる。中国の画家が西洋の絵画様式や技法をいかにして中国にローカライズしたのかについては、検討に値する課題である。

研究方法においては、時間的发展を軸とし、個別事例の研究を通じて、図像が生み出された背景、図像の内容の考証、図像の伝播経路とその影響など、多角的な視点から分析を加えることで、明清中国におけるキリスト教図像の制作・受容・伝播の歴史的文脈の復元を試みる。また、図像の「中国化」という文化的現象を多面的に考察することで、中国におけるキリスト教美術研究に新たな視点と可能性を開くことにもつながると考えている。

本論は5章で構成される。

第一章では、『程氏墨苑』におけるキリスト教の受容について考察しながら、本作の図像の着想源について検討する。百科全書的性格を有する集成出版物として編纂・刊行された『程氏墨苑』は、天地や人物から儒・仏・道・耶に至るまで、あらゆる主題を網羅しようとする意図のもとに構成されており、先行して刊行された『方氏墨譜』と競合していた。本書は、刻工にとって刻印技術を学ぶための図譜および版本であると同時に、後世の墨商および出版業者が「墨譜」や「図繪」を編纂する際に影響を及ぼした。そのことから『程氏墨苑』は、明清におけるキリスト教図像が民間において生成・伝播された事例の一つであると位置づけることができる。その解釈文に注目し、リッチと程大約が西洋版画からこれらの図像を選んだ理由を提示する。当時の社会背景や思想背景に注目し、「宝像図」の特異性と機能を指摘しながら、そこに反映されているイエズス会の17世紀初期の中国での布教における策略を明らかにする。

次に、第二章では、中国最初のキリスト教教義挿絵本である『誦念珠規程』と『天主降生出像経解』を中心に考察する。『誦念珠規程』については、『福音書画伝』原本との比較と変更点に関してすでに多数の指摘があり、図像をめぐる先行研究が十分に充実している。

しかし、従来は美術史の観点から『誦念珠規程』の図像を研究する際、多くの場合、図像そのものから直接考察を始めており、その宗教的背景に対する検討が見過ごされてきた。本章では、イエズス会士ダ・ロシャがなぜこの『誦念珠規程』を中国での最初のキリスト教教義挿絵本として選んだのかについて検討する。『天主降生出像経解』の版本については、『福音書画伝』の原本と比較し、図像の傾向をまとめたうえで、変容した図像の形成と制作背景、そして17世紀の中国におけるロザリオ信仰とマリア崇敬を明らかにする。

第三章では、アダム・シャール『進呈書像』の受容について考察する。先行研究を踏まえた上で、西洋の宗教絵画と明代版画との比較を行い、本作の図像の着想源について検討する。先行研究において、『進呈書像』の人物や風景には中国への現地化の傾向があることが指摘されていることを鑑み、図像の中国化が顕著に起きていたととれる『進呈書像』のモチーフについて、明代版画と比較する。また明代版画、特に明末徽派版画との類似性を示す。シャールは『進呈書像』において意識的にこの「受難」の精神を中国人の前に提示しようとしたが、そのような布教の試みは、楊光先をはじめとする反キリスト教人士によって逆用され、宣教師が中国において「謀反」を企てているという告発の証拠にさえなった。反キリスト教人士たちが『進呈書像』に収められたキリスト受難図を翻刻した事例からは、中国人における「受難」と「救済」に対する理解の不足がうかがえるが、この種の反キリスト教図像の生成自体が、まさにキリスト教美術が「中国化」される過程における独自の様相を示すものでもあることを論じる。

第四章では、カスティリオーネの宮廷画とその活動について考察する。康熙帝と雍正帝による禁教政策のため、中国に派遣された宣教師であるにもかかわらず、カスティリオーネの作品には明確なキリスト教関連の要素が見られない。しかし、中国におけるキリスト教図像が木版画から油絵・銅版画へと展開していく過程において、カスティリオーネの中西折衷的な作品の影響は看過できないものと考えられるので、カスティリオーネによって描かれた皇室肖像画と銅版画に見られる中西融合の様式と特徴を考察する。

第五章では、土山湾画館と中華聖母の図像の形成について検討する。土山湾画館で制作された一連の聖母像の着想源を検討した上で、中華聖母像の形成の経緯を明らかにすることを目的とする。そして、本作の図像が清皇室と深く関わっていることを確認する。

以上の議論により、宗教的な布教活動、文化の適応、そして政治的な意図が複雑に絡み合った視覚文化の変遷が、明から清末にかけてのキリスト教布教とその本土化においてどのように反映されたのかを考察する。先行研究を踏まえた上で、西洋の宗教絵画と明代版画との比較を行い、図像の着想源について検討する。また中国明清におけるイエズス会の背景に注目し、「中国化」されたキリスト教美術作品の形成の経緯を明らかにすることと、その位置づけに対する理解を深めることを目指す。

論文審査の結果の要旨

氏 名	曁 琪	
論 文 題 目	明清時代におけるキリスト教美術の「中国化」	
要 旨		
	主 査 記 載 氏 名	宮下 規久朗
『大秦景教流行中国碑』により、唐貞観九年（635）、キリスト教の支派であるネストリウス派の主教阿羅本は宣教団を率い、「経像」を手に持ち、首都長安に到達した。阿羅本がもたらした「経像」は、中国における最初のキリスト教図像の記録である。しかし武宗による仏教弾圧に伴い、西方より伝来した宗教はすべて禁圧され、景教も衰退・消滅していった。宗教改革後に設立されたイエズス会は、新航路開拓国における布教の拡大を目的とし、中国・日本・インドなど東方諸国へ布教した。それによって明末期、キリスト教は急速に普及した。 宣教師たちの中国来訪は、明後期の学者たちの知識の視野を拡大し、天文学・暦法・地理学・水利工学・数学・芸術など諸分野における重要な著作の誕生を促した。1583 年にイタリア人宣教師ミケーレ・ルッジェーリおよびマッテオ・リッチが中国に進出した明万暦七年（1579）が「中国における宣教の基盤が確立された年」と見なされており、リッチの来中は「西洋美術が中土に伝来した始まり」とも位置づけられている。顧起元の『客座贅語』（1617 年）には、リッチが聖母子像の銅版画を所持しており、その陰影表現が中国画と異なっていることについて述べ、陰影法が宣教師によって中国にもたらされたことが確認できる。イエズス会士が書籍を媒介として中国人に宣教するため、『程氏墨苑』・『誦念珠規程』・『天主降生图像経解』・『進呈書像』などのキリスト教版画入り書籍を刊行した。そして清朝宮廷において新たな版画形式として銅版画が登場した。咸豊元年（1861）に創設された土山湾画館は、キリスト教美術に関連した多くの作品を生み出し、「中国風」と称される独自の画風を形成した。 中国のキリスト教美術についての早い時期の研究は、1910 年にベルトルト・ラウファーの論文「中国のキリスト教美術」、1921 年のポール・ペリオによる「利瑪竇時代に中国に伝来したヨーロッパ絵画と版刻」および 1927 年の「17・18 世紀におけるヨーロッパの中国美術への影響」、1930 年に向達が発表した「明清之際における中国美術の西洋影響」、1939 年にパスクワーレ・M. デリアが執筆した『1583－1640 年における中国キリスト教美術の起源』などが挙げられ、1995 年に町田市立国際版画美術館が開催した展覧会『中国の洋風画展』の図録に、多くの研究者による明清期洋風画の研究結果が収録された。アレクサンダー・ベイリーは 1999 年に出版した『1542－1773 年 アジアおよびラテンアメリカにおけるイエズス会芸術』において、キリスト教絵画・版画・建築のみならず、研究対象を刺繍などの工芸美術にまで拡大し、中国キリスト教美術の図像資料を豊かにした。 本課題に関しては多くの研究蓄積があるものの、概ねキリスト教の発展史という範囲にとどまっており、図像の解釈は焦点とされていないか、特定作品の解釈に限定されている。本論文は、明清時代におけるキリスト教美術の「中国化」の発展過程を整理し、中国美術史の研究に組み込むことである。またこの過程において、キリスト教文化と美術が中国においていかに展開・変容し、いかなる影響を及ぼしたのかを考察することを目指す。 第 1 章では、『程氏墨苑』におけるキリスト教の受容について考察しながら、本作の図像の着想源について検討する。百科全書的性格を有する集成出版物として編纂・刊行された本書は、天地や人物から儒・仏・道・耶に至		

るまで、あらゆる主題を網羅しようとする意図のもとに構成されており、先行する『方氏墨譜』と競合していた。本書は、刻工にとって刻印技術を学ぶための図譜および版本であると同時に、後世の墨商および出版業者に影響を及ぼした。そのことから、明清におけるキリスト教図像が民間において生成・伝播された事例の一つであるといえる。解釈文から、リッチと程大約が図像を選んだ理由を提示する。当時の社会背景や思想背景に注目し、その特異性と機能を指摘し、イエズス会の17世紀初期の中国での布教における策略を明らかにする。

第2章では、中国最初のキリスト教教義挿絵本である『誦念珠規程』と『天主降生出像経解』を考察する。『誦念珠規程』については、『福音書画伝』原本との比較と変更点に関してすでに多数の指摘があり、図像をめぐる先行研究が十分に充実している。しかし多くの場合、その宗教的背景に対する検討が見過ごされてきた。本章では、イエズス会士ダ・ロシヤがなぜこの『誦念珠規程』を中国での最初のキリスト教教義挿絵本として選んだのかについて検討する。『天主降生出像経解』の版本については、『福音書画伝と比較し、図像の傾向をまとめたうえで、変容した図像の形成と制作背景、そして17世紀の中国におけるロザリオ信仰とマリア崇敬を明らかにする。

第3章では、アダム・シャル『進呈書像』の受容について考察する。先行研究において、人物や風景の表現には中国への現地化の傾向があることが指摘されているが、『進呈書像』のモチーフは明末徽派版画との類似性を示す。シャルは『進呈書像』において意識的に「受難」の精神を提示しようとしたが、そのような試みは、楊光先をはじめとする反キリスト教人士によって逆用され、宣教師が中国において「謀反」を企てているという告発の証拠になった。反キリスト教人士たちが『進呈書像』に収められたキリスト受難図を翻刻した事例からは、中国人における「受難」と「救済」に対する理解の不足がうかがえるが、この種の反キリスト教図像の生成自体が、まさにキリスト教美術が「中国化」される過程における独自の様相を示すものでもあった。

第4章では、カステリオーネの宮廷画とその活動について考察する。康熙帝と雍正帝による禁教政策のため、宣教師であるにもかかわらず、カステリオーネの作品には明確なキリスト教関連の要素が見られない。しかし、中国におけるキリスト教図像が木版画から油絵・銅版画へと展開していく過程において、その中西折衷的な作品の影響は看過できないものと考えられ、皇室肖像画と銅版画に見られる中西融合の様式と特徴を考察する。

第5章では、土山湾画館と中華聖母の図像の形成について検討する。土山湾画館で制作された一連の聖母像の着想源を検討した上で、中華聖母像の形成の経緯を明らかにすることを目的とする。そして、本作の図像が清皇室と深く関わっていることを確認する。

本研究は、宗教的な布教活動、文化の適応、そして政治的な意図が複雑に絡み合った視覚文化の変遷が、明から清末にかけてのキリスト教布教とその本土化においてどのように反映されたのかを考察し、図像の着想源について検討したものであり、明清時代におけるイエズス会の背景に注目し、キリスト教美術の「中国化」について重要な知見を得たものとして価値ある業績であると認める。よって、学位申請者の聂琪は、博士（学術）の学位を得る資格があると認める。

審査委員

区 分	職 名	氏 名	区 分	職 名	氏 名
主 査	教授	宮下 規久朗	副 査	教授	濱田 麻矢
副 査	准教授	野田 麻美	副 査	大阪市立 美術館 学芸員	田林 啓
副 査	嘉興大学 設計学院 講師	邬 松林			